

Laura Ingalls Wilder作『大きな森の小さな家』および『大草原の小さな家』に見られる子育て・親子関係・家族関係

山内 圭*

教養科

(2005年11月9日受理)

本論は、アメリカ人女性作家Laura Ingalls Wilder作の『大きな森の小さな家』および『大草原の小さな家』から、子育て、親子関係、家族関係などに関わる描写を抜き出し、検討を加えたものである。これらの物語は、19世紀のアメリカ開拓時代を舞台としているが、そこで描かれる、子育て、親子関係、家族関係などは、普遍的なものであることがわかった。

1. はじめに

『大きな森の小さな家』(*Little House in the Big Woods*, 1932) および『大草原の小さな家』(*Little House on the Prairie*, 1935) は、アメリカ人女性作家Laura Ingalls Wilder (1867-1957) が自分の少女時代の経験を描いた自叙伝的小説である。これらの小説には19世紀のアメリカの開拓時代の生活が鮮やかに描かれている。これらはアメリカでドラマ化されたのち、NHKで現在でもしばしば放送され、多くの日本人にも知られている。物語中に描かれる、主人公ローラのインガルス家を中心とした家庭生活の中には、当時の、そして現在にも十分通用する子育て、親子関係、家族関係についての考えが随所に見られる。本稿は、物語中に見られる子育て、親子関係、家族関係に関する部分にスポットを当て、検討を加え、当時の、そして現在のアメリカ社会にも見られる子育て観・家族観などを考えていくことを目指している。なお、本稿は、平成14年度新見公立短期大学第31回公開講座のテーマ「子育て・孫育てを楽しむ」に基づき、同短期大学の原田信之・助教授とともに平成14年6月28日におこなった「日米文学に見られる子育て」と題する講座のうち筆者が担

当したアメリカ編の講演内容に加筆修正したものである。

2. 主人公の家族構成について

主人公ローラは父チャールズ (Charles) と母キャロライン (Caroline) との間に生まれた次女であり、2つ年上の姉メアリー (Mary)、3つ年下の妹のキャロライン (キャリー) (Caroline (Carrie))、10歳年下の妹グレース (Grace) がいた。

3. 子が親を呼ぶ呼び方

まずは、インガルス家では、子どもがどのように親を呼んでいたのか、見てみたい。

小さな女の子の名まえはローラ、そして、お父さんのことは父さん (Pa)、お母さんのことは母さん (Ma) とよんでいた。そのころ、そのあたりの子どもたちは、いまのように、お父さん (Father)、お母さん (Mother) とか、パパ (Papa)、ママ (Mamma) とかよんだりしなかったからだ。(森6, W2-3) ¹⁾

*連絡先：山内圭 教養科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

『大きな森の小さな家』は1932年に出版されているが、その時代に既にこのような記述がなされているのは興味深い。現在でも、『ランダムハウス英和大辞典』第2版において“Pa”の項には「現在はあまり用いられない」(1950)、“Ma”の項には「米国では古い、田舎風な語になっている」(1619)の記述が見られる。

4. 父親の役割

4-1. 安心させる

まず見られる父親の役割は、子どもたちを安心させることである。特に当時の開拓民の生活には、野獣や原住民の襲撃などの不安があり、この役割はとても重要だったものと思われる。次の場面は、父親チャールズが就寝時に娘たちを安心させている場面である。

そんなとき、父さんは、いつもこういつてくれる。

「おやすみ、ローラ。ジャックは、おおかみなんか、ぜったい、中に入れやしないんだから」

それをきくと、ローラは、小さなベッドのかげぶとんにほっかりくるまって、メアリーによりそい、すやすやとねむってしまうのだった。(森8, W3)

ここに出てくる、ジャック (Jack) とはインガルス家の飼犬の名前である。

就寝時やあらゆる機会に、子どもに話を聞かせる、または、親たちや祖先の話を伝えることも、後述するように父親の役目であるが、そのような話の中には、野獣や原住民の襲撃などのように、子どもたちを不安にさせるような要素も含まれる。次の引用は、そのような場面からのものである。

父さんが話しているあいだじゅう、ローラとメアリーは、ふるえながら、父さんにぴったりと体をすりよせていた。父さんのひざにのり、たくましい腕で、しっかりとだいてもらっていたら、二

人とも、ぬくぬくと安心していられる。(森38-39, W44)

たくましい腕 (his strong arms) で子どもを抱いて安心させることも父親の大切な役割である。

次の場面も、父親が娘たちを安心させている場面である。

ローラは、金切り声をあげた。

「なあに？ なあに？ 父さん、あれは、なあに？」

体じゅう、ぶるぶるとふるえ、胸がむかむかする。太鼓のとどろきと、きゃんきゃんというような、あらあらしいさげび声がまたきこえ、気がつくと、母さんが、しっかりだきしめていてくれた。

「インディアン、ときの声だよ、ローラ」

と、父さんはいった。

母さんが、小聲で、しいっという、父さんはいった。

「子どもたちも知っていたほうがいいんだよ、キャロライン」

父さんは、ローラに話してくれた。あれは、インディアンが、戦いの相談をするやり方なのだ。インディアンは、ただ相談して、たき火のまわりをおどりまわっているだけだ。メアリーもローラも、こわがらなくていい。父さんもいるし、ジャックだっている。それに、フォート・ギブソンと、フォート・ドッジには、軍隊がいるんだから、と。

「だから、こわがらなくてもいいんだよ、メアリーも、ローラも」

父さんは、くりかえした。

ローラは、大きく息をのみこんでからいった。

「はい、父さん」(原280-81, P290-91)

この場面では、子どもを抱きしめているのは母親である。父親は、その不思議な声が「インディアン」²⁾のときの声であることを説明し、どんなものかを子どもたちに話し、また父親がいることで、こわがらなくてもいいことを説いている。たくましい腕で抱きしめるばかりではなく、言葉により

子どもを安心させることも、父親の役目である。

4-2. 狩り、およびその後の獲物の処理

当時の開拓者の生活においては、狩りをする事、そしてその後に獲物の処理をすることも、次の引用のように、父親の役目である。

雪におおわれた大きな森の、こごえるような寒さの中で、父さんが一日じゅう、たった一人で狩りをして、母さんやメアリーやローラの口にはいるものは、なにももたずかえってくるという夜もあるかもしれない。

だから、冬のくる前に、できるだけたくさんの食料を、小さな家にたくわえておかねばならなかった。

父さんは、鹿の皮をていねいにはいだから、塩をふって皮をのびした。この皮で、父さんは、やわらかなめし皮をこしらえるのだった。つぎに、肉を切りわけ、板の上にならべると、塩をふった。(森10, W6)

まずは、厳しい自然環境の中での狩りについての言及があり、それが父親の仕事であることが明らかになる。また狩りで獲物が獲れた場合は、その処理も父親の仕事となる。ここでは、食料の肉の処理だけではなく、鹿の皮からめし皮を作ることも父親の仕事として紹介されている。

4-3. 話を聞かせる（伝える）

先ほど、父親の子どもを安心させる役割のところで、少し述べたことであるが、父親の役目として、子どもに話を聞かせる、言い換えると、話を次の世代に伝えるということが紹介される。ここでは、父親が、自分の父親、つまり子どもたちにとっては祖父の話を伝える場面を引用する。

父さんは、ローラとメアリーを、すわりごちがいいように、ひざにだきなおした。

「さあ、おじいちゃんとおひょうの話をしてあげようね」

「父さんのおじいちゃんのこと？」

と、ローラはきいた。

「いいや、おまえたちのおじいちゃん。父さんの父さんだ」

「ああ、そうか」

といって、ローラは身をよじると、父さんの腕にもたれた。おじいちゃんなら、ローラだって知っている。大きな森のずっとむこうにある、大きな丸太小屋にすんでいるのだ。父さんのお話が、はじまった。(森35-36, W40)

当時はテレビもラジオもなく、そのようなお話が大きな娯楽であった時代である。そのような話が娯楽的側面だけではなく、家族の歴史、あるいは開拓の歴史を語るという役割も持っていた。ローラ達は祖父母と同居をしていないので、(父方の)祖父母の話を語って聞かせることも父親の役目として描かれている。この話は、おじいちゃんが銃を持たずに森に行き、ひょうと出会い追いかけれ怖い目にあったという話である。そして、最後には「もう二度と、銃をもたずに、大きな森にはいかないと、おじいちゃんはいってたよ」という教訓で、話は終わっている。話を子どもに聞かせることは、同時に教訓を伝えることにもなっている。

次の場面は、父親が自分自身の子ども時代の話子どもたちに聞かせる場面である。長い部分のため、中略をはさみ引用する。

弾づくりがおわり、弾ごめがすむと、さあ、お話の時間だ。

「『森の声』のお話をしてよ」

ローラは、父さんにせがむ。

父さんは目をくしゃくしゃにして、わらいながらいう。

「おやおや！ 父さんがいたずらぼうずだったころの話なんか、ききたくないだろうに」

「ううん、ききたい！ ききたい！」

ローラとメアリーは声をそろえる。そこで、父さんのお話がはじまる。

——父さんと森の声のお話——

「父さんが子どもだったころ、そう、メアリー

よりほんのすこし大きいくらいのときかな。毎日、お昼すぎには森へ行って、はなしてある牛をさがして家につれてかえるのが、父さんの仕事だったんだよ。父さんの父さんは、道草を食っちゃいけないよ、日がくれるまでに、大いそぎで牛をつれてかえるんだよ、と、いつも父さんにいていた。森の中には、熊や、おおかみや、ひょうがいるからね。

ある日のこと、父さんはいつもよりはやく家をでた。(中略) 森の中には、いっぱい見るものがあつたから、日がくれるのもわすれてしまった。(中略)

と、そのとき、はっと気がつく、小鳥たちが『おやすみ』とさえずりあっているじゃないか。森の中の小道は、うす暗くなってぼんやりしているし、木立の中は、真っ暗だ。

さあ、牛をはやくあつめて、家にかえらなきゃ、牛小屋にぶじつれもどすまでに、真っ暗になってしまう。けれど、その牛が、見つからないじゃないか！(中略)

そのとき、ちょうど頭の上で、だれかがたずねるのだ。

『ほおうっ、だれだね？』

ぞっとして、父さんの髪の毛は、さかだった。

『ほおうっ？ だれだね！ ほおうっ？』

また、声がした。それから父さんは走った、走った。

牛のことなど、すっかりわすれてしまった。ただもう、暗い森の中からにげだして、家へかえることしか、頭になかった。(中略)

とうとう暗い森をぬけだし、牛小屋のわきへでた。すると、牛がみんなかえってきて、柵の横木をはずしてくれるのを、待っているじゃないか。父さんは牛を入れてやり、家まで走ってかえった。

父さんの父さんは、じろりと見て、いったものだ。

『ぼうず、なんでこんなにおそくなつたんだ？ 道草を食つたのか？』

父さんはうつむいて、つま先を見た。すると、かたいぼうの親指のつめが、きれいにはがれてしまっている。あんまりこわかつたものだから、

そのときまで、いたいのにながつかなくつたんだね」

ここまでくると、いつも父さんはことばを切り、ローラがこういうのを待っている。

「つづけて、父さん！ それから、どうなつたの？」

「よしよし」と、父さん。「それから、おまえたちのおじいちゃんは、庭にでていき、むちにするしっかりした小枝を切ってきて、父さんのおしりをピシピシたたいたのさ。おじいちゃんのいいつけを、二度とわすれないようにね。

『九つにもなつた男の子なら、父さんのいいつけを、ようくおぼえているはずだ』おじいちゃんはいった。『父さんのいいつけには、そうしなきゃいけないわけでもものがある。そのとおりにしたら、ひどいめにあわずにすむんだ』

「そうよ、そうよ、父さん」ローラは、父さんのひざでびよんぴよんはねながら、いう。「それから、おじいちゃん、なんていったの」

「おじいちゃんはいったよ。『もしもわしのいったとおりにしていたら、日がくれてから、大きな森にひとりぼっちでとりのこされるなんてこともなかつたし、ふくろうの声をこわがったりしなくても、すんだんだよ』とね」(森45-50, W53-58)

非常に長い引用であるが、ここにはいろいろな要素が含まれている。まずは、この話がこのとき一度限りのものではなく、何度となく語られていることが、ローラが話をせがんだり、聞いているときのいつもの反応の描写でわかる。先述のように、他に娯楽が少ない当時においては、物語は子どもにとっては大きな楽しみの一つであつたので、この話はインガルス家では何度も語られたであろうことが推測できる。繰り返しが物語の伝承にとって非常に大切なことは明らかである。ローラがせがむことにより、父親は、「父さんがいたずらぼうずだつたころの話なんか、ききたくないだろうに」と言いつつも、目をくしゃくしゃにして笑っている様子が描かれている。また父親は自分の少年時代の失敗談を語るにより、結局は父親の言いつけは守るべきだという教訓を含む話を何度

も子どもたちに聞かせているのである。この話は、結局ふくろうの「フー (Who)」という泣き声が「だれだね (Who?)」と聞こえ、こわがっているという落ちがあるものだが、その、おかしさゆえにローラは何度もこの話をせがんだと思われる。また、自分の祖父も出てくるこの話も家族の歴史として語られるという側面をももつ。

教訓を与えるという意味では、チャールズは普段から、折に触れておこなっていたようである。次のエピソードが、それを語っているようだ。

というわけで、その日のお昼は、種いもを食べた。おいしいじゃがいもだった。ローラは、父さんが、「大きな損をしたときには、ちよっぴり得もするものだ」というのはほんとうだな、と思った。(原309, P320)

4-4. 銃の弾を作る

先ほどの引用の最初の部分でも、「弾づくりがおわり、弾ごめがすむと、さあ、お話の時間だ」と言及されていることだが、この銃の弾を作るというのも当時の父親がすべき役割のひとつであった。弾は、当時の開拓者生活においては、食糧確保と家族の保護という二重の意味で重要であったので、それを父親がおこなっていたということは、食糧確保と家族の保護において父親が中心的な役割を果たしていたということにはほかならない。次の引用も、父チャールズの弾作りを描いている。

毎晩、お話をはじめる前に、父さんは、つぎの日の狩りにつかう弾をつくった。

ローラとメアリーも、父さんのおてつだいをした。二人は、長い柄のついた大きなスプーンと、鉛のかけらがぎっしりはいった箱、それに、弾の鋳型をはこんでくる。それから、父さんが暖炉の前に、どっかりと腰をおろして、弾をつくるあいだじゅう、両側にすわって、じっと見物した。(森40, W45)

この、弾作りとお話の時間がセットになって毎晩繰り返されているのである。子どもたちも、弾作り後のお話の時間を楽しみにしながら、父親が、

自分たちの食べ物を確保するため、そして、自分たちを守るために、弾を作る様子を毎晩目の当たりにしているのである。

4-5. バイオリン (フィドル) を弾く

バイオリンを弾くことが、当時の一般的な父親の役割だったかどうかはわからない。ただ、この物語中には父親がバイオリンを弾く場面が描かれる。これは、作者ローラ・インガルス・ワイルダーの父親がバイオリンを弾くのがうまかったためだと考えられる。

こそこそ、話をつづけていると、母さんがいった。

「チャールズ、この子たち、あなたが、バイオリンをひいてやらないと、ねませんよ」

そこで、父さんは、バイオリンをとりだした。

部屋の中はしずかで、あたたかくて、暖炉の火に、あかあかと照らしだされていた。壁に母さんのかげが、イライザおばさんのが、ピーターおじさんのが、ちらちらまたたく火かげに、大きくうつって、ゆらゆらゆれている。父さんのバイオリンは、つぎつぎに、たのしくうたいつづける。

「お金じゃこうじか」(Money Musk)「赤毛のわか牛」(The Red Heifer)「悪魔のゆめ」(The Devil's Dream)「アーカンソーの旅人」(Arkansas Traveler) ……。

ローラは、父さんがバイオリンにあわせて、しずかにうたっているあいだに、ねむってしまった。(森63-64, W73)

原文では、バイオリン (violin) ではなく、実はフィドル (fiddle) という語が使われている。いずれにせよ、父チャールズが、子どもを寝かしつける子守唄としてバイオリンを弾いていることが描かれる。

『大きな森の小さな家』の最後の場面においても、父チャールズが子守唄としてバイオリンを奏でる場面が描かれる。それが次の引用である。

父さんは、メアリーを、子どもいすからだき

あげ、二人をいっしょにだきしめた。

「いい子たちだなあ」父さんはいった。「さあ、もうねる時間だ。はやくおいき。父さんはバイオリンをとってくるから」

ローラとメアリーがお祈りをすませて、ベッドのかけぶとんにふんわりくるまったころには、父さんは、暖炉の火に照らされて、バイオリンを手にしていた。明かりは、もういらない。暖炉のむこうがわで、母さんは、しずかにゆりいすをゆすっている。あみかけのくつ下の上を、あみ針がでたりひっこんだりするたびに、きらきら光った。

暖炉の火と音楽のある、長い冬の夜が、もどってきたのだ。

父さんのバイオリンは、父さんの歌にあわせて、ものがなしい調べをかなでた。

(中略)

バイオリンがうたうのをやめたとき、ローラは小さな声できいた。

「すぎにし日々って、なんのこと、父さん？」

「遠いむかしの日のことだよ、ローラ」父さんがいった。「さあ、もうおやすみ」

けれども、ローラはもうしばらく、横になったまま目をあけている。父さんがひく、やさしいバイオリンのしらべと、大きな森の、さびしげな風の音に耳をかたむけながら。ローラは、暖炉のそばにすわっている父さんに目をやった。暖炉の明かりが、父さんの茶色い髪と、ほおひげをかすかに照らし、バイオリンは、蜂蜜色に、つやつやと光っている。母さんは、しずかにゆりいすをゆすり、あみものをしている。(森 197-99, W236-38)

この場面は、インガルス一家の平和な様子を描いたものである。その中で、母親はゆりいすに座って編み物をし、父親は得意なバイオリンを弾き、子どもたちを寝かしつけているのである。筆者は、ここでいうバイオリンは、必ずしもバイオリンでなければならないわけではないと考える。その父親の持っている特技を子どもに披露するということが必要であると考えられる。

4-6. 遊具を作る

父親の役目として、子どもたちの遊びの道具を作ることもあげられる。インガルス家での描写を引用してみる。

家の前の大きな櫨の木の下には、二人のままごとの家があった。メアリーのままごとの家はメアリーの木の下、ローラのままごとの家はローラの木の下。やわらかい草は、二人の家のじゅうたんだ。

みどりの葉は屋根になり、そのすきまから、ちょっぴり青空がのぞいていた。

父さんは、じょうぶな木の皮でぶらんこをつくり、ローラの木の、しっかりしたひくい枝にぶらさげてくれた。これは、ローラの木の下に下がっているのだから、ローラのぶらんこだったけれど、そんなわがままはいわないで、メアリーがのりたいたときには、いつでも、のせてあげなければいけなかった。(森133, W157)

この描写から、家の前には、それぞれメアリーの木とローラの木という大きな櫨の木があり、その下には、それぞれのままごとの家があることがわかる。そしてローラの木の下に父親がブランコを取り付けたと書かれている。子どもたちのための遊び道具を作ることも、父親の大切な役割である。

4-7. 生活の知恵を教える

父親の役目として、生活の知恵を子どもに教えることも描かれている。次の場面は、その一例である。

父さんは、地面にぐると大きく円をえがくように、草をひきぬいた。みどりの草の根もとには、去年の枯れた草があるので、大草原を、万が一にも火事にするようなことはしないように、という心くばりだ。もし、いったん、からからにかわいた下草に火がつけば、草原全部が、真っ黒な、はだかの焼け野原になってしまうだろう。父さんは、「用心にまさるものはないからな。ころばぬ先のつえさ」といった。

草をぬいてあき地ができると、父さんは、か

わいた草をひとにぎり、そのまん中においた。それから、川にそった低地から、小枝と枯れ木を、ひとかかえもってきた。ひとにぎりの枯れ草の上に、小枝をのせ、そのつぎに、もうすこし大きな枝をのせ、それから枯れ木をのせて、草に火をつける。草をぬいた円の内側で、火はパチパチと、気もちよく燃え、円の外には、ぜったいにでていかない。(草30-31, P29-30)

ここでは、大自然の中に生きる知恵が子どもに伝授されている。また、『大草原の小さな家』のこの場面では、インガルズ一家はカンザス州への移動中であり、周りには住人がいない状態であったが、草原というのは、家畜や移動に使う馬のえさの供給という意味からも、開拓民全体の共有財産であるにとらえることが可能である。そのような共有財産を失うことになってしまえば、社会全体の損になるという立場に立てば、草原の火事を防ごうとするこの父親チャールズの行為は、家族を火事の危険性から守る行為であるとともに、公共財産を守るために最低限のルールを守るという社会のルールを守る行為でもあるということができる。林道義が『父性の復権』で述べるように、「子どもに社会のルールを教えるのも父性の大切な役割である」(58)であることから、ここでのチャールズの行為は子どもに生活の知恵を教える行為であるとともに、社会のルールを教える行為であるとも解釈できる。

5. 母親の役割

5-1. 家事

母親の役割で頻繁に描かれているのが家事の場面である。ローラの母親キャロラインが行っていた家事は、次の引用ではっきりとわかる。

これがおわると、母さんは、その日の仕事にとりかかる。毎日、その日のわりあての仕事というのがあって、母さんは、いつも、こんなふうにいっていた。

月曜日は せんたく

火曜日は アイロンかけ

水曜日は つくろいもの

木曜日は バターづくり

金曜日は そうじ

土曜日は オープンをつかって

日曜日は 休息の日 (森26, W29)

当時の主婦が日常的に行っていたのは、このように、せんたく、アイロンかけ、つくろいもの、バターづくり、そうじ、オープンを使った料理などの家事であったようである。

5-2. 外出時の家族の身の仕度・世話

家族の普段の身の回りの世話は、主に母親あるいは主婦の仕事であった。そして外出時の身の回りの仕度や世話も、母親および主婦の仕事として描かれている。次の描写にそれが見られる。

「あすは町へいくぞ」

その晩、週の半ばだというのに、母さんは、ローラとメアリーをおふろに入れてよくあらい、髪をセットしてくれた。長い髪をいくふさにもわけ、ぬれたくしで、ひとふさずつとかけから、布の切れはしをむすんで、しっかりまきつけるのだ。二人の頭は、ちいさなこぶだらけになって、まくらに頭をのせると、どっちをむいてもごろごろした。朝になれば、二人の髪は、きれいなまき毛になるはずだ。

二人とも、すっかりはしゃいだので、すぐにはねむれなかった。いつもなら、つくろいもののかごをだしてすわりこむ母さんも、さっと食べられるように朝ごはんを用意したり、みんなの服をそろえたりで、大いそがしだった。ローラたちの、いっちょうらのくつ下やペチコートやワンピース、父さんのよそいきのシャツ、自分用には、むらさき色の小さな花もようがついた、こい茶色のキャラコの服をならべた。(森136, W160)

このように、翌日の町への外出のため、二人の娘を風呂に入れ、髪を整えたり、家族が着ていく服を用意したり、朝早い出発に備えてすぐ朝食が食べられるように準備したりするのは、母親あるいは

は主婦の役割である。

5-3. 娘に手伝わせる

インガルス家には、物語のこの段階で物心がついているのは、メアリーとローラの二人だけであった。その二人の娘に当時の女性にとって必要な技術、料理などの家事の仕方を教えることも母キャロラインにとっては大切な役割であった。そのため、母親は娘にできるだけ家事を手伝わせている。次の場面もそのような場面である。

ローラとメアリーは、母さんのそばにつきっきりで、できることはなんでもてつだった。母さんがカードに塩をふったところで、二人は、ひと口ずつたべさせてもらうのがたのしみだった。カードは、歯の間で、キシキシ音をたてた。(森159, W188-89)

ここでは、ローラとメアリーがつきっきりで母親の手伝いをしている様子が描かれている。ここでいうカード (curd) とは「凝乳」のことで、このようにして母から娘に料理の技術が伝承されているのである。

次の場面も同様に料理技術の伝授が見られる。

ローラは、いすの上に立って、母さんのかわりにかぼちゃの見はり役になり、木のしゃもじでかきまぜた。しゃもじは両手でもち、用心しいしいかきまぜた。というのも、もし、かぼちゃがこげついてしまったら、かぼちゃのパイはできないのだから。(森183, W217)

このようなプロセスを経て、母親の作るパンプキンパイの、そしてその他の「お袋の味」の伝授が行なわれてゆく

5-4. 技術の伝授

先ほどの章では、料理技術の母親から娘への伝授を見ていったが、次の引用は別の技術の伝承の場面である。

母さんは、いちばんきれいな細いさなで、

ローラとメアリーのぼうしをつくった。父さんと自分用は、幅広の、きざみめを入れたさなでつくった。これは、父さんが日曜日にかぶる、よそいきのぼうしだ。つぎに、あらくあんだ、いちばん幅広のわらで、父さんのふだん用のぼうしをふたつつくった。

母さんは、ぼうしをつくりおえるごとに、板の上にならべてかわかし、あんだとおりのきれいな形になるようにととのえた。すっかりかわいたときには、母さんが思ったとおりの形になっていた。

母さんのつくったぼうしは、とてもいい形だった。ローラは、母さんの仕事ぶりを見ているのがすきで、麦わらでさなだをあむやりかたをおぼえると、小さなぼうしを、シャーロットにつくってやった。(森180-81, W214-15)

帽子を作る技術も、このように母親から娘に伝授されていたことがよくわかる。なお、ここで出てくるシャーロットとはローラの人形の名前である。

6. 物語中にみられるしつけ

6-1. 姉妹平等

物語中には、さまざまなしつけに関する場面も出てくる。この章では、物語中に描かれる当時のしつけをみていくこととするが、まずは、姉妹平等に扱うことについて考えてみたい。

ローラとメアリーは、しばらくかすのにんじんを食べさせてもらった。メアリーは、あたしはねえさんなんだから、たくさんもらうのがあたりまえと思っているし、ローラのほうも、わたしは小さいんだから、たくさんもらってもいいはずだという。でも、母さんは、きちんと同じだけわけなさいよ、というのだった。このにんじんは、とってもおいしかった。(森27-28, W30-31)

先述のように、姉メアリーが妹ローラよりも2歳年上であるが、母親は二人の姉妹を平等に扱って

いる。

6-2. 分け合いの精神

次は、先ほどの姉妹平等と共通することであるが、分け合いの精神を養うしつけについてみてゆきたい。

母さんが声をかけた

「ローラ、みんなにお人形をだかせてあげないの？」

母さんは、「小さな女の子は、自分のことばかり考えてはだめよ」といっているのだ。

そこで、ローラは、メアリーにきれいなお人形をわたし、それからアリスにもちよっぴり、つぎにエラにもだかせてあげた。女の子たちは、人形のかわいいドレスをなで、赤いフランネルのくつ下や、くつや、毛糸の黒いちぢれ毛を、かわいいわねえ、とほめてくれた。

でも、ローラは、シャーロットがやっこのことで、ぶじに自分の腕にもどってきたとき、ほっとした。(森66, W77)

ローラは自分のお気に入りのお人形シャーロットを、できれば独り占めしたい。でも母親に促されて、この場面ではほかの女の子たちに抱かせてあげているのである。4-6のところでは言及した、ローラの木の下にぶらさがっているぶらんこをメアリーと仲良く使うように言われているのも、分け合いの精神を養うためである。

6-3. 子どもは話しかけるまで話すべからず

これは、英語圏ではしばしば言われる諺であるが、実際、物語中のしつけとして出てくる。その場面を引用する。

いよいよ昼になり、クリスマスのごちそうを食べることになった。アリスも、エラも、ピーターも、メアリーも、ローラも、テーブルにいたら、ひとことも口をきかなかった。食事のときは、子どもはおとなしくすわっているだけで、口をきいてはいけないといわれていたから。(森69, W80)

これは、クリスマスに親戚が集まって食事をしている場面である。「食事のときは、子どもはおとなしくすわっているだけで、口をきいてはいけない」(children should be seen and not heard)といわれている。日本では、子どもも大人も食事中には話をせず食べることがよいとされてきたが、英語圏では通常、話をしながらの食事が奨励される。Irene E. Schoenberg氏によると、アメリカでは(食事中に)話すことがないときには、“One”, “Two”, “Three” …と交互に数字を言うとさえ言われている(25)。ただ、それは、大人のことで、子どもは、話しかけられない限り、黙っているのがよいとされる。この、“children should be seen and not heard”は辞書にも掲載されていて、たとえば『ランダムハウス英和大辞典』第2版では、“children should be seen and [or but] not heard”として「子供は(その場)にいてもよいが行儀よくおとなしくしているべきである」(477)のように紹介されている。大人の会話には口をさしはさまないでいて、話しかけられたときにのみ答えるようにしつけられるのである。このことは、かなりきつく言われているようで、二つの物語中何度も言及される。

大きな声をだしたあとで、ローラは思いだした。こどもは、大人に話しかけられるまで、だまっていなければいけないのだ。ローラは口をつぐんだ。(原66, P66)

これは、客が来ての食事の後、父親のチャールズが得意のバイオリンを弾きながら歌を披露した場面でのことである。

うちの中は、ほんとうに気もちよかった。ローラの口の中の、らいちょうの焼き肉は、汁けをたっぷりふくんで、とてもおいしい。手や顔はあらってあるし、髪もとかして、首にはナプキンがむすんである。まるい丸太の上にもっすぐこしかけて、ローラは、母さんにおしえてもらったとおり、じょうずに、ナイフとフォークをつかった。食事のときには、子どもは、話し

かけられるまでしゃべってはいけない、といわれているので、ローラは、なんにもいわなかった。でも、父さんと母さんとメアリーと、母さんのひざにいる赤んぼうのキャリアを見ているだけでじゅうぶんだった。また家の中でくらせるなんて、ほんとうにすてきなことだ。(原115, P119)

これは、インガルス一家がウィスコンシン州の「大きな森の小さな家」を離れ、長旅の末、カンザス州の「大草原の小さな家」に落ち着いた後のローラの気持ちを描かれた部分である。先ほどの、母親の役割のところでは触れなかったが、ナイフとフォークの使い方を教えるのも、母親の役目であったこともここでわかる。

メアリーとローラは、顔を見あわせた。質問したってむだなことは、わかっていた。「話しかけられたときにしか、しゃべってはいけませんよ」とか、「食事のときは、子どもはそこにすわっていればいいの、おしゃべりはだめ」とか、またいわれるにきまっているのだから。(原279, P289)

というように、子どもは食卓ではお話しをしてはいけないということは、かなりきびしく言われていることが伺える。

これは、ある意味では、犬のしつけとも類似している。犬のしつけは、下記の引用のように描かれている。

ローラは、ジャックに、ちょっぴりのこしてやる。ジャックは、食事のあいだは、ねだっちゃいけないよ、といわれているけれど、夕ごはんがおわれば、すぐに、たっぷりえさをもらえるのだった。(原319-20, P331-32)

犬のジャックが、人間が食事をしている間、ねだるために吠えたり、うなったりすることが許されていなかった様子が伺える。これは食事が終わるまでは、話しかけられるまでは話してはいけないといわれた子供たちとある意味で似ている。

また、子どもたちは、たとえ許されて食卓で話すときにも、次のことは気をつけなければならなかった。

「パプーズはどこにいるの？ 母さん」

ローラが、たずねた。

「口の中がいっぱいのときは、しゃべっちゃいけませんよ、ローラ」

そこでローラは、よくかんで、のみこんで、それからいった。

「パプーズが見たいの」(原47, P46)

パプーズとは原住民の赤ちゃんのことである。原住民の赤ちゃんを見たかったローラはいつも注意されているだろうことを忘れて発言してしまう。そこを、母親に「口の中がいっぱいのときは、しゃべっちゃいけませんよ」(Don't speak with your mouth full.) と注意されているのである。

6-4. 父の言うようにすること

すでに、4-3において父親の言うことは絶対従わなければならないという教訓を含む物語をチャールズがローラにしたことを紹介したが、ここでは、チャールズがローラに直接、父親の言葉には従うべきであることを告げる場面を見ておきたい。

「これからは」と、父さんは、おそろしい声でいった。「いつでも、いわれたとおりにしなきゃだめだよ。父さんのいったことをまもらないなんて、考えてもいけないことだ。わかったか？」(原139, P145-46)

これは、父親の留守中に、家に原住民が二人やってきた時、犬のジャックを放してはいけないという父親の言いつけに反して、ローラがジャックを放そうと思ったということを、あとで父親に告白したときのことである。開拓民と原住民との関係は、非常にデリケートなもので、もしローラがここでジャックを放し、ジャックが原住民に噛み付いてでもいたら、物事は平和に解決しなくなったであろう。開拓民の生活は、子どもの勝手な判断

によって物事がうまくいかなくなるのを許すほど、余裕のある生活ではないのである。したがって、このような父親の言いつけには絶対従うこと、というような強い教訓が必要となる。

このチャールズの娘に対するのと同様の態度が、犬のジャックに対してもあらわれる。それが以下の場面である。

「しずかにしろ！」

父さんがいった。でも、ジャックは、またうなった。そして、ほんとうにはじめて父さんは、ジャックをなぐった。

「ふせろ！ しずかにするんだ！」

ジャックはおびえてうずくまり、しずかになった。(原293, P304)

これも、原住民がインガルス家に近づいてきたときのもので、ジャックは以前自分に銃を向けたことのある原住民に対してうなっているのである。しかし、お互いに緊張状態にある原住民に対して、飼い犬の行動から攻撃の原因をあたえてはいけなないので、チャールズは、ジャックに対して初めて殴るという厳しい態度に出ているのである。

父親の強い態度があらわれているもうひとつの事柄は、ローラたちは、父親が話すときには、口をはさまないように、言われていたことである。それがわかるのが次の場面である。

父さんは、おおかみのことについては、まだひとこともいわない。ローラは、早くいえないのに、と思っていた。でも、父さんが話しているときには、口をはさんではいけない、ということはローラもよくわかっていた。(原86, P88)

ふだんは、優しい父親チャールズであるが、このようにしっかりとけじめをつけたしつけをしていたようである。

また、次の引用も父親の言うことはきかなくてはならない、ということがあらわれている。

ある晩、ローラと父さんは、戸口の段々に腰

をかけていた。月は、まっ暗な大草原をくまなく照らし、風もなく、父さんはしずかにバイオリンをかなでていた。

父さんは、おしまいの音を、長く長く、月の光にとけこんでしまうまで、ふるわせる。なにもかも、とてもうつくしく、ローラは、いつまでもずっとこのままでいられたら、と思うのだった。でも父さんに、もう子どもはねる時間だよ、といわれてしまった。(原154, P162)

この言葉を言われてしまったら、ローラは、床に入らざるを得ないのであろう。

6-5. 抱きしめる

抱きしめることは、親の子への愛情表現として大切な行為であるが、物語中にも、そのような場面が散見される。

ある日曜日のこと、晩ごはんのあとで、ローラは、どうにもがまんができなくなった。ジャックと遊びはじめ、しばらくすると、大声をあげて走りまわった。父さんに、いすにすわっておとなしくしてなさい、といわれると、いすにこしかけてはみたものの、すぐに大声でなきだし、かかとで、いすの足をけとばしはじめた。「日曜日なんか、大っきらい！」

父さんは、読みかけの本をおいて、きびしい声でいった。

「ローラ、ちょっとおいで」

ローラは、いやいやながら、いった。おしりをぶたれるのにきまっているのだから。でも、父さんのところにいくと、父さんは、ローラの顔を、しばらく、かなしそうにじっと見つめてから、ひざにだきあげ、ぎゅっとだきしめてくれた。(森73-74, W86)

この引用部のあと、父親チャールズはローラに、彼女の祖父の時代のさらにすごしくかった安息日としての日曜日の話を聞かせている。

次の引用も、同様に父親チャールズがローラを抱きしめる場面である。ローラは自分の髪の色が茶色なのに、姉メアリーの髪が金色であることを

快く思っていない。

ローラは、のどがぐっとつまって、口がきけなかった。ローラだって、金髪は茶色よりきれいだと思っている。ローラは、口がきけなかったもので、さっとメアリーのそばにいくと、ほったをピシャンとたたいた。

するとローラの耳に、父さんがこういうのがきこえた。

「ここにおいで、ローラ」

ローラは、のろのろと、足をひきずりながらいった。父さんは、戸口をはいったすぐのところすわっていた。ローラが、メアリーをピシャンとたたいたところを、見てしまったのだ。「わすれたのかい」と父さんはいった。「おまえたち女の子は、ぜったいにたたきあいなんてしちゃいけないといっただろう」

ローラは、だまっていなかった。

「だって、メアリーが……」

「なにがなんでも、いけないのだ。父さんが、いつもいっているだろう」

父さんはそういうと、壁からむちをとり、ローラをたたいた。

ローラは、すみっこのいすにすわってないた。なきやんでも、ローラは、ふくれつつらをしていた。ひとつだけいきみだったのは、メアリーが、一人で木ぎれをひろって、なべをいっぱいしなければならなかったことだ。

ずいぶんたって、暗くなりかけたころ、父さんがもう一度声をかけた。

「ここにおいで、ローラ」

父さんの声は、やさしかった。そして、ローラが父さんのところにいくと、父さんはひぎにのせて、ぎゅっとだきしめてくれた。父さんの両腕の中にすわって、頭を父さんの肩によせると、ローラの目に、父さんの長い茶色のほおひげがふわっとかかった。父さんは、もう、おこってないし、ローラのふくれつつらもなおっていた。(森155-56, W183-84)

体罰に対する考え方は当時と現代とで異なっているが、この場面では、父親チャールズが女の子は

絶対に叩き合いをしてはいけないといい、鞭打ちの罰を与えている。しかし、しばらくして、「ここにおいで」と言い、だきしめている。呼び寄せて抱きしめる、これは洋の東西、時代を問わず、親の子どもに対する愛情表現であろう。なお、父親チャールズも、この引用にあるように「長い茶色のほおひげ」を持ち、彼の髪も茶色で、ローラの髪と同じ色なのである。

6-6. 誕生日に愛情をこめて叩く

先ほどの引用で、鞭で娘を叩く場面を見たが、次の引用は、娘の誕生日に、その成長を願って軽くおしりを叩く場面である。

その日の朝、父さんは、朝ごはんを食べにもどってくると、ローラをつかまえて、さあ、おしりをたたかなくちゃ、といった。

でも、たたく前に父さんは、今日はローラの誕生日だから、おしりをたたいておかないと、これから一年のあいだに、大きくなれないんだよ、といいきかせてくれた。それから、ローラがちっともいたくないように、やさしく、そっとおしりをたたいた。

「ひとつ、ふたあつ、みいつ、よつつ、い一つ、むつつ」

父さんは、ゆっくりと数えながらたたいた。はじめの五つは、年の数。そして、おしまいに、うんと大きくなれるように、ぽーんと、もうひとつ。(森82, W97)

誕生日に子どもを軽く叩くことは、子どもから悪霊を取り除くために行なわれる習慣であるようだが³¹⁾、親の子どもに対する愛情がよく現れた場面である。ローラも、悪いことをしてのお仕置きとは違い、叩かれるのを楽しんでいるはずである。

6-7. 狩は食のためにのみと（命の大切さを）教える

開拓者の生活では、食のために動物を殺すことは避けられない。ただ、むやみやたらに動物を殺すのではなく、生活の必要上であること、子どもの動物を殺さないことや、子どもの動物が幼いと

きはその親を殺さないことなどを実践することにより、命の大切さを教えている。

「小さな赤ちゃん鹿は、うたないんでしょう、父さん？」

ローラはいった。

「もちろん、うたないよ！」父さんはこたえる。「母さん鹿だろうと、父さん鹿だろうと、うたないよ。いまのところは、狩りはおやすみさ。小さいけものたちが、みんな、すっかり大きくなるまではね。秋がくるまで、新しい肉はおあずけ、ということにしようじゃないか」（森 135, W159）

肉を食べるということは、普段ではなかなか味わえないご馳走であるはずだが、この場面では、父親チャールズは、ローラに、鹿が十分大きくなるまでは、そのご馳走はお預けであると言い、むやみな殺生をしないことを教えている。

6－8. 甘やかしはよくないこと

次の引用は、やや長いものであるが、インガルズ家に親戚のヘンリーおじさんとポリーおばさんがその息子チャーリーを連れてやってきたときのことである。

お昼に、父さんとヘンリーおじさんは、大いそぎでかえってきた。そして、かむひまもおしように、お昼ごはんをかきこんだ。ヘンリーおじさんは、午後は、チャーリーにもてつだってもらうよ、といった。

ローラは、ヘンリーおじさんがそういったとき、ちらっと父さんの顔を見た。前に、家で、父さんが、ヘンリーおじさんとポリーおばさんは、チャーリーをあまやかしていると、母さんにいったことがあるのだ。父さんが十一歳のときには、牛二頭をつかって、毎日、畑の仕事を一人前にやってのけたという。それなのに、チャーリーときたら、ほとんどなにも仕事はしてなかった。

けれども、ヘンリーおじさんは、きょうは、チャーリーも畑にでてこい、といったのだ。チ

ャーリーがいれば、ずいぶん時間の節約になるだろう、という。水をくみに泉にいったらったり、父さんたちがのどがかわいたときに、水さしをもってきてもらえる。刃をとぎたいときには、砥石をもってきてもらえば大だすかりだ、と。

子どもたちは、みんな、チャーリーの顔を見た。チャーリーは、畑にいくのなんていやにきまっている。庭で遊びたかった。でも、もちろん、そんなことは口にださなかった。

（中略）

父さんと、ヘンリーおじさんのてつだいをするはずだったチャーリーは、てつだうどころか、思いついたいたずらを、つぎからつぎへとやってのけたのだった。杵つき鎌をふりおろそうとすれば、まわりをうろちょろして、あぶなくてしかたない。刃をとごうと思えば、砥石をかくしてしまうので、あっちこっちさがさなければならぬ。ヘンリーおじさんが水さしをもってこいといっても、三度も四度もどなるまでこないし、やっときても、ふくれつつらをしてる。

そのあとも、二人のあとをつきまとして、ペチャペチャしゃべったり、なんだかんだと話しかける。父さんたちはいっしょうけんめいはたらいっているから、チャーリーのことなどかまっていられない。そこで、あっちにいて、じゃまをするな、といってきかせた。

ところが、しばらくすると、チャーリーの悲鳴がきこえたものだから、二人は、杵つき鎌をほうりだして、畑をつきつけてかけつけた。畑のまわりには、ぐるりと森にかこまれているから、麦畑の中には、へびがいるのだ。

チャーリーのところにかけてみると、なにかわったことなどない。チャーリーは、おとなたちにむかって、げらげらわらいながら、こういったという。

「ほうら、だまされた！」

父さんは、もし、自分がヘンリーおじさんなら、あの子のためにも、すぐ、その場でおしりをたたいて、ぞんぶんにしおきしてやっただろう、といった。でも、ヘンリーおじさんは、なにもしなかった。

(中略)

それから三回も、チャーリーは、金切り声をあげたという。父さんとおじさんは、そのたびに、必死でかけつけたのに、チャーリーは、わらっているだけだった。チャーリーは、おもしろいじょうだんのつもりだったのだ。そこまできても、ヘンリーおじさんは、おしおきをしなかった。

やがて、四回めの悲鳴が、それまでよりも大きな声で聞こえてきた。父さんとヘンリーおじさんがチャーリーのほうを見ると、ぴょんぴょんとびながら、金切り声をあげている。二人の目には、あぶないことごとがおこっているようには見えなかったし、もう何回もだまされていたので、そのまま仕事をつづけた。

チャーリーはわめきつづけ、声は、ますます大きく、かんだかくなっていった。父さんはなにもいわなかったが、ヘンリーおじさんは、「すきなだけわめくがいい」といった。そして、二人は麦刈りをつづけ、チャーリーには、かってにわめかせておいた。

チャーリーは、いつまでたってもとびはね、金切り声をあげている。いっこうに、やめるけはいもない。とうとう、ヘンリーおじさんがいった。

「なにか、ほんとうにまずいことかもしれん」

二人は、杵つき鎌をおくと、畑を横ぎって、チャーリーのところにいった。

ところが、そのあいだじゅう、チャーリーは、すずめ蜂の巣の上でとびはねていたのだ！

すずめ蜂は、土の中にある巣にすんでいる。チャーリーは、うっかり、その上にのってしまったのだ。おこった蜂たちは、黄色い縞の上着をきらめかせ、毒のあるすどい針をかざして、むれをなしてとびだした。そして、チャーリーにおそいかかったものだから、チャーリーは、うごけなくなってしまったのだ。

チャーリーは、ぴょんぴょんとびあがり、何百匹きもの蜂は、ところきらわずさしまくった。顔、手、首をさし、ズボンの足をはいのぼってさし、首からせなかにはいおりてさす蜂もいた。チャーリーがはねまわって、金切り声をあげれ

ばあげるほど、蜂たちは、ここを先途と、さしまくった。(森171-75, W203-07)

このとき麦の刈入れ作業を手伝いに来ていたヘンリーおじさんは、ローラの母親キャロラインの兄であり、その妻ポリーおばさんは、ローラの父親チャールズの妹である。開拓時代の開拓民家族には、現在のように多くの人間との出会いがあるわけではなく、このように二つの家族の子どもたちが何組か夫婦になるということは珍しくなかったのかもしれない。両家の間には、チャールズの兄のピーターとキャロラインの妹イライザの夫婦というもう一組のカップルも存在した。親がそれぞれ兄弟同士といえども、しつけの方針は夫婦によって異なるもので、チャールズは、以前からヘンリーとポリー夫婦が息子チャーリーを甘やかしすぎていると考えていた。この引用中でも大人に迷惑をかけるチャーリーに対して、義兄弟のヘンリーは何も言わない上、チャールズとローラが自分たちの娘たちに厳しく言い聞かせている、子どもは話しかけられない限り話してはならない(6-3参照)ということがチャーリーにはできていない。そんなチャーリーと、その両親であるヘンリーとポリーのしつけに対してチャールズが不満を持っているところである。

6-9. 当然の報い

先ほどの引用場面の続きであるが、いたずらをしたチャーリーが、すずめ蜂に刺されたことが、当然の報いとして書かれる。

ローラとメアリーは、ふるえあがった。ローラたちだって、しょっちゅういたずらはする。でも、二人とも、いままで、チャーリーがやったようないたずらは、かんがえたこともない。チャーリーは、からす麦をだめにしないようにてつだおう、という気もなかった。自分の父さんに用事をいつけられても、さっと、いわれたとおりにしなかった。父さんとヘンリーおじさんがきつい仕事をしてるというのに、じゃまばかりしたのだ。

このあと、父さんは、すずめ蜂の巣のことを

話してきかせてから、こういった。

「うそつきこぞうには、とうぜんのむくいだっ
たよ」

その夜、ベッドにはいったローラは、どしゃ
ぶりになった雨が屋根をたたき、ひさしからザ
ザー流れおちるのをききながら、父さんがい
ったことを考えていた。

ローラは、すずめ蜂がチャーリーにしたこと
を考えていた。ローラも、それが、とうぜんの
むくいだと思った。チャーリーは、しんじられ
ないほどひどいいたずらこぞうだったから、そ
のむくいをうけたのだ。そして、蜂のほうだっ
て、チャーリーに巣をふみにじられたのだから、
チャーリーをさすのもむりはない。(森178,
W210-11)

ローラとメアリーは、いとこのチャーリーの一件
から、悪い子にしていると「当然の報い」がある
ということを学んでいる。

6-10. 食べ物で遊ばないこと、残さず食べる こと

日本でも「食べ物で遊ぶな」とはよく言われる
ことであるが、この物語でも、同様に食べ物で遊
ぶな、そして、残さず食べろ、というしつけが行
なわれていることがうかがわれる。その部分を引
用する。

お昼ごはんには、パンといっしょに、煮つめ
たかぼちゃを食べた。ローラたちは、お皿の上
で、かぼちゃをきれいな形にまとめた。きれい
な色で、ねっとりしているので、ナイフをつか
えば、とてもすてきな形がくれるのだ。母さ
んは、ふだんは、食事ときには食べもので遊ん
ではいけませんと、きびしくいう。子どもたち
は、自分の前によそってもらったものは、なん
でもきれいに、お皿にはなにひとつのこさずに、
食べなければいけなかった。けれども母さんは、
ぽってりと煮こんだ黄色いかぼちゃを、食べる
前にきれいな形にすることだけは、大目に見て
くれた。(森183-84, W218)

かぼちゃの煮つめたものを、いろいろな形にする

ことは、食べ物で遊ぶというよりも、むしろ、趣
のあることである。また、残さずに食べるという
ことは、現在のアメリカの飽食の消費社会からは
考えにくいことではあるが、開拓者家族であるこ
とを考えれば、当然のしつけであろう。

6-11. 名前を呼んで注意する

日本語でも、子どもの名前を呼ぶことで、そん
なことはやめなさい、という意味の注意の言葉に
なることがある。それは英語でも同様で、この物
語でも、名前を呼ぶことによって、子どもを注意
している場面がある。

「あーあ、あ！」

メアリーがあくびをし、ローラがいう。

「母さん、おりて馬車のあとから走っちゃだ
め？ 足がだるくてたまらないの」

「だめですよ、ローラ」

母さんという。

「もう、そろそろキャンプをするところじゃない
の？」

ローラはたずねる。馬車のかげで、きれいな
草の上にすわってお昼ごはんを食べたときか
ら、もう、ずいぶん長いことたっているような
気がする。

父さんが、返事をした。

「いや、まだだ。いまからキャンプをしちゃ、
早すぎるよ」

「もう、キャンプしたいよう！ くたびれちゃ
ったもの」と、ローラ。

すると母さんが、「ローラ！」といった。母
さんがいったのはそれだけだったが、それは、
ぶつぶつ文句をいってはいけません、という意
味だった。そこで、ローラは、それ以上は口に
だしてはいわなかった。(原16-17, P14-15)

ここでの母親の口調は、かなりきつかったと思わ
れる。それは、エクスクラメーション・マーク(!)
からもわかる。これはかなり効果的で、その後ロ
ーラは口に出しての文句は言わなかったようであ
る。

6-12. 母親の強い口調

次に見るのは、『大草原の大きな家』の初めの部分で、インガルス一家が馬車で移動している場面である。このとき、一家は大きな川にさしかかり、馬車でそれを渡ろうとしていた。

水音がやんだ。と思うと、母さんが、きつい声でさげんだ。

「二人とも、ふせていなさい！」

メアリーとローラは、ぱっと、ふとんの上につぶした。母さんがこういう口のききかたをするときは、二人ともいわれたとおりにすることになっていた。(原23, P20-21)

前項と同じく、母親の口調はかなりきつかったと思われる。ふだん、優しい母親がきつい口調で何かを言うことは、かなり効果のあることであろう。

7. 子どもから見た親

7-1. 父の帰宅を楽しみにしていること

インガルス一家では、父親が農作業に出かけたり、狩りに出かけたりで、昼間は家の外で働いている場合が多い。次の引用は、日中、外で働いた後、帰宅する父親を、娘たちがどのように迎えるのかがわかる場面である。

でも、一日のうちにいちばんたのしいのは、父さんが家にかえってくる夜だった。父さんは雪のつもった森の中を、あちこち歩きまわるので、いつも口ひげの先に、ちっちゃなつららをつけてもどってきた。入り口の扉の上に鉄砲をかけ、毛皮のぼうしとオーバーと手ぶくろをぬぎすてると、父さんは大声でよぶ。「のみかけのりんご酒の小びんちゃんは、どこにいるのかな」

ローラのことだ。ローラはとてもちっちゃかったから、父さんはいつも、こんなふうによんでいた。

ローラとメアリーは父さんにかけよって、ひざによじのぼり、父さんが暖炉のそばであたたまるまで、そのまますわっていた。(森30,

W33-34)

ローラは、父の帰宅する夜を一日のうち一番楽しいと感じていた。父親が帰宅すると、大声で呼んでくれ、ローラとメアリーは暖炉のそばで一緒に座っていたようである。

7-2. 父親不在時の不安

先ほどの項で述べた、父親が帰宅するのを楽しみにする子どもの気持ちの裏返しであるが、父親が留守の時は、娘たちは寂しさと不安を感じている。次の引用は、そのような気持ちが描かれる場面のものである。

夜明け前に、父さんは家をでていった。ローラとメアリーが目をさましたときには、もう父さんの姿はなく、家の中は、がらんとして、さびしかった。いつものように狩りにでかけるときとは、まるっきりちがう。父さんは、町へいったきり、四日という長いあいだ、かえってこないのだから。

子馬のバニーは、馬小屋に入れられていたから、母さん馬のあとを追うわけにはいかなかった。子馬には、道のりが遠すぎるので、とてもむりだった。バニーは、さびしそうに、いかなかった。ローラとメアリーは、母さんといっしょに、家にこもっていた。父さんがいないと、外はあんまり広すぎて、からっぽで、遊ぶ気にもなれない。ジャックまで、なんとなく不安げで、しょっちゅうあたりに気をくばっていた。(原200, P208)

父さんが留守中は、「家の中は、がらんとして、さびしかった」し、「父さんがいないと、外は(も)あんまり広すぎて、からっぽ」だった。ここには、一家を守ってくれる大黒柱が不在時の不安がうまく描かれている。

7-3. 父の帰宅で安心する

先ほどの引用で、父親の四日間の留守で不安な様子のローラが描かれていたが、次の引用は、その長い留守のあと、父親が帰宅した場面のもので

ある。

ローラはいつねむってしまったのか、わからなかった。光り輝く天使たちが、母さんと声をあわせてうたいはじめ、ローラは横になって、その天国の歌声をきいているうちに、はっと目がさめて、暖炉の前に父さんが立っているのを見つけた。

ローラはベッドからとびだして、大声でよんだ。

「父さん、父さん！」

父さんのブーツには、こおりついた泥がこびりつき、鼻は寒さでまっか、髪の毛は、むちゃくちゃに、ばりばりさか立っていた。父さんの体はひえきっていて、そばによっただけで、ローラのねまきをとおして、寒さがつたわってくらいだった。

「ちょっと、まった！」

父さんは、母さんの大きな肩かけで、ローラをすっぽりくるんでから、だきしめてくれた。なにもかも、みんなもとどおりになった。家の中は、暖炉の火で、ぬくぬくと気持ちよかったし、コーヒーの、あたたかくて、こうばしいにおいもしている。母さんは、にっこりほほえみ、父さんは、ここにいる。(原212-13, P220-21)

この引用の少し前には、このような描写もある。

キャリーはすすすやねてしまったけれど、母さんは、しばらく、ゆりいすをゆすっていた。そのうち、キャリーの服をぬがせ、ベッドにつれていった。ローラとメアリーは、思わず顔を見あわせた。二人とも、まだベッドにはいりたくなんかなかった。

「ねる時間よ、二人とも」

母さんがいった。おねがい、父さんがかえるまで、おきてもいいでしょう、と、ローラがねだると、メアリーも応援するものだから、しかたなく母さんも、いいでしょうといった。

二人は、いつまでもおきていた。メアリーがあくび、ローラがあくび、二人そろって、また

あくび。でも二人とも、せいっぱい、目を大きく見ひらいている。ローラの目の中で、まわりのものが、ぐんぐん大きくなったかと思うと、こんどは、小さく小さくなる。メアリーが二人見えたかと思うと、どこにもいなくなってしまう。でも、父さんがかえるまでおきてなくちゃ。いきなり、ひどいいきおいで、なにかにぶつかって、びっくりすると、母さんがだきあげてくれる。ベンチからころがりおちて、床にぶつかったのだ。

あたし、まだねむくないから、ベッドにはいらない……と、母さんにいおうとしたけれど、顔がふたつにわれてしまいそうな、とてつもない大あくびがでてしまった。(原210, P217-19)

このような状態で眠くなりながらも、何とか父親の帰りを待っていたローラであった。しかしいつの間にか眠ってしまって、先の引用部分のように父親が帰ってきて目を覚ましたのであった。父親がそばにすることが、ローラの心の安心のもととなっていることが、よく描かれている部分である。

7-4. 母親を素敵だと思う

娘にとって母親は、憧れの存在であろう。したがって、その母親がすてきな女性であることは、娘にとって誇らしいことであるはずである。

「キャロラインがいったけど、結婚したころ、あの人のウエストは、チャールズの両手の中に、すっぽりおさまってしまったんですって」

キャロラインというのは、ローラの母さんだ。これをきいて、ローラはとてもほこらしく思った。(森119, W140)

ここには、母親がスタイルがよかったことを聞いて、誇りに思う娘ローラの気持ちが描かれている。

次の場面は、ローラが母親をきれいだと思う場面である。

母さんも、きれいだった。いちごの実のように見える小さな葉っぱが、いちめんまきちらしてある、深みどりのモスリンがよく似合う。

ひだをとったスカートは、ふちかざりをつけて、ゆったりふくらみ、深みどりのリボンをちょうむすびにしたかざりが、いくつもついている。えりもとには、金のブローチをとめている。そのブローチは平たくて、ローラのいちばん太い指二本をあわせたほどの幅があり、いちめんに彫刻をほどこし、まわりは波形にしあげてあった。母さんがあんまりはなやかなでりっぱなので、ローラは、さわるのがこわいほどだった。(森120-21, W141)

ここでは、娘のローラは母親のあまりのきれいさに、おどろいているのである。

次の場面は、ローラが母親のダンスがうまいのを素敵だと思うところである。

みんな、父さんのかけ声どおりにうごく。ローラは、母さんがスカートを波だたせ、細い腰をかがめ、黒髪の頭をさげおじぎをするのを見つめながら、母さんのおどりは、世界一すてきだと思うのだった。(森122-23, W145)

ふだんは、あまり着飾らず、家事に追われている母親が、特別な時には、きれいに着飾って、すてきにダンスをしているのである。その姿を見て、娘ローラは誇らしく思っているのである。

7-5. 父の進取性をすばらしいと思う

父親チャールズは、開拓者であったため、かなりの進取性を持っていたと思われるが、そのなかでも特別の進取性を持っていたものと思われる。そして、その父親の進取性をローラは、すばらしいと感じている。

あの機械は、すばらしい発明だ！

古いやりかたにしがみつきたいれんじゅうは、そうすりゃいいさ。だけど、わたしは新式をとるね。われわれは、すばらしい時代に生きているんだ。うちでは、小麦をやるかざりは、機械をよんで脱穀してもらうつもりだ。近くにあれがあればの話だけだね」

父さんは、その夜、とてもつかれていたんで、

ローラとは話をしなかったけれど、ローラは、父さんのことが、とてもほこらしかった。みんなによびかけて、小麦をひとところにまとめて、機械をたのんだのは父さんだったし、ほんとうにすばらしい機械だったのだから。みんな、機械をよんでよかったと、大よろこびだったのだ。(森191, W228)

このように、ローラは、父親の進取性、みんなを取りまとめリードしている姿が、とても誇らしいものだと感じている。

7-6. 父がこんなに怒るのを見るのは初めて

次の場面は、カンザス州の「大草原の小さな家」に移住していたインガルス一家が、先住民居留地内に侵入しているということで、追い出される可能性があることがわかった時の父親チャールズの様子である。

父さんの顔はまっかで、その目は、青い炎が燃えているようだった。ローラは、びっくりしてしまった。父さんがこんなにおこっているのを見るのは、はじめてだった。母さんにぴったり身をよせて、ローラは口もきけずに、父さんを見つめていた。

インガルス家は、この翌日、荷物をまとめ1年間住んだ「大草原の小さな家」を離れることとなる。

8. 作品中に見られる祖父母像

8-1. 祖父(母)は森の奥に住む

ローラの祖父母は、次の引用に見られるように、森の奥に住んでいたようである。

おじいちゃんは、大きな森の、ずっと奥にすんでいて、そこには、ここよりももっと大きな木が、びっしりはえている。(森102, W119)

祖父は、森の奥に住み、かえでからかえで糖(maple sugar)を取っている。そして、そんな祖父(母)がみんなを招待するという。その場面が

次の引用である。

「そうとも、大よろこびだったよ。こんどの月曜日に、もう一度砂糖をつくるから、みんなにおいでっていったよ」(森108, W128)

これは、祖父母の家から帰った父親チャールズのせりふである。そして、インガルズ一家は、祖父母の家に遊びに行くことになる。ローラは、そんな祖父母の家が大好きであった。

そのことがわかるのが、次の引用である。

ローラは、おばあちゃんの家が大スキだった。この家は、ローラの家よりずっと大きい。ものすごく広い部屋がひとつと、ジョージおじさんの小さな部屋、それに、ドーシアおばさんとルビーおばさん用の部屋もあった。もうひとつ、大きな料理用ストーブをすえた台所もある。

大きな部屋でたのしいのは、りっぱな暖炉の前から、反対側のすみにある窓の下、おじいちゃんのベッドまで、はしからはしまで走りぬけることだ。床は、おじいちゃんが丸太を斧でわってつくった、幅の広い、厚い板がはってある。どこもかしこもすべすべの床は、まっ白にみがきこんであるし、窓の下ベッドには、ふわふわの羽ぶとんがかかっている。(森113, W133-34)

この引用には、孫にとって、祖父母の家がいかに魅力的であるかが描かれている。自分の家よりも大きく、はしからはしまで走り抜けることを楽しめる、みがきこんだ床に年季が入っている、そんな、祖父母の家がローラは大好きだと思っている。なお、ここでローラがいう「おばあちゃんの家」とは、先述の、おじいちゃんが、森の奥に住む家と同じである。

8-2. 祖母の笑いが父の笑いと似ている

孫にとって、祖母あるいは祖父が、自分の父親または母親の親であったと実感するのは、ある意味では驚きである。また、そのことに気づくことは、同時に、その孫の成長をも意味している。こ

れは、市川恵氏の詩「おばあちゃん もしかしておとうさんは おばあちゃんから 生まれたのありがとねえ」⁴⁾に歌われているメッセージと同じものである。ローラは祖母と父の笑いの共通点を見出す。

みんな、いっせいに声をあげた。大声でさけぶ人、金切り声をだす人、ドシドシとブーツをふみならす人、おばあちゃんに声をかける人、大さわぎになった。おばあちゃんは、もう二、三分おどって、それから足をとめた。息を切らせながらわらうおばあちゃん。その目は、父さんがわらうときとよく似て、きらきらしていた。ジョージおじさんもわらっていた。わらいながら、そででおでこをぬぐう。(森127, W150)

ローラにとっては、大好きな父親が大好きな祖母に似ていること、二人の笑う目がよく似ていること、それらは、とてもうれしいことだったに違いない。そしてそれを見つけたことは、大発見だったに違いない。

8-3. おばあちゃんの味

祖母の手料理というのは、どんな時代でも、どんな場所でも、格別のものであったようで、この物語にも、それがよくあらわれている。

ふにゃふにゃのかえでキャンディを、気がすむまで食べた人は、長いテーブルにならべてあるかぼちゃのパイや、干したくだもののパイ、それに、クッキーやケーキを自分でとって、すきなだけ食べた。テーブルには、塩味の発酵パンもあったし、ひやしたゆで豚や、ピクルスもあった。そのピクルスの、すっぱかったこと！

だれもが、もう、これ以上は食べられないと思うまで食べ、それから、また、ダンスをはじめた。けれども、おばあちゃんは、なべの中の蜜から、目をはなせない。何度も何度も、お皿にすこしだけとりわけて、ぐるぐるかきまぜ、首をふっては、蜜をなべにもどした。(森128-29, W151-52)

この描写により、集まった誰もが、祖母の手作り菓子の数々に満足していたことがよくわかる。長いテーブルの上に並べられた、かえでキャンディ、かぼちゃパイ、干しくだものパイ、クッキー、ケーキ、塩味の発酵パン、ひやしたゆで豚、すっぱいピクルス。誰もが、好きなだけ、もうこれ以上は食べられないと思うまで食べることができたのである。さらに、祖母は、なべで念入りに、蜜を煮詰めている。これらの食品に、祖母の愛情が十分込められていたことが感じられる描写である。

9. 作品中に見られるおじ

9-1. 一緒に踊ってくれたおじ

先述のように、ローラの両親のそれぞれの兄弟姉妹が他にも2組の夫婦となっていたので、計3組の夫婦は、とても親密で、一緒に移住したり、共同作業を行ったり、行き来も頻繁であった。また、祖父母の家には、先ほど引用したように、ジョージおじさん、ドーシアおばさん、ルビーおばさんも同居している。ローラたちは、おじやおばとの交流もかなり頻繁にあったと考えられる。ここでは、ローラのジョージおじさんとの交流を描いた場面を引用する。

ローラの足も、ひとりでにうごきだしてしまう。ジョージおじさんが、それを見てわらった。そして、ローラの手をとると、すみのほうで、ちょっとおどってくれた。ローラは、ジョージおじさんがすきになった。(森124, W146)

一緒に踊ることで、ジョージおじさんが好きになったという描写である。

10. 理想の家族像（結論に代えて）

以上、ローラ・インガルス・ワイルダーの『大きな森の小さな家』および『大草原の小さな家』のインガルス家の描写を通じて見られる、子育て、親子関係、家族関係について考察をしてきた。

優れた文学の一つの特質とは、普遍的なことである。これらの作品が出版以来、多くの読者に読

み続けられているのは、アメリカ中西部の開拓時代の一家族のことを書いているのにもかかわらず、世界のどの地域の、そしてどの時代にも通ずる普遍性を持ち合わせているからだといえる。これらの作品の家族描写には、たしかに開拓時代のアメリカ中西部特有のものも見られるが、そのほとんどは、全人類共通のものである。最後に、この作品中の、理想的な家族像を引用することによって、本論を終えたいと思う。

父さん、母さん、メアリー、ローラ、そして赤んぼうのキャリーまで、あんまりうれしくて、わらいがとまらなかった。父さんは、いつだって、とても大きな声でわらう。まるで、大きな鐘がいくつもなりわたっているようだ。母さんは、うれしいときにはいつも、やさしいほほえみをうかべ、そんな母さんを見ると、ローラは、体じゅうがあたたかくなる。けれども、いまは、その母さんまで大きな声でわらっていた。なんといったって、牝牛が手にはいったのだから。(原160, P168)

注

1) 本論においては、一般読者の便宜を図るため、引用文は全て日本語訳を使用する。日本語訳はそれぞれ『大きな森の小さな家』（こだまともこ、渡辺南都子訳、講談社、東京、1992）『大草原の小さな家』（こだまともこ、渡辺南都子訳、講談社、東京、2001）を使用する。引用ページは『大きな森の小さな家』の場合は「森」の文字とページ数で示し、『大草原の小さな家』の場合は「原」の文字とページ数で示すものとする。また併せて、Harper Trophy版の原書 *Little House in the Big Woods* および *Little House on the Prairie* におけるページ数をそれぞれ、「W」の文字とページ数および「P」の文字とページ数の形式で記載する。

2) 「インディアン」という語は使わないほうが好ましい語とされるが、ここでは、翻訳版の表現をそのまま使用する。なお、原作でも Indian

という語が用いられている。

- 3) <http://teacherlink.ed.usu.edu/tlresources/units/Byrnes-celebrations/CelebrationSymbols.html>
(2005年9月18日参照)

- 4) 市川恵氏は知的障害のある20歳の女性で、彼女のこの詩にバイオリニストの川井郁子氏が曲をつけ、歌手の白鳥英美子氏が歌ってNHKの「みんなのうた」でも紹介された。この詩については下記URLを参照のこと。

<http://www.nhk.or.jp/fnet/arch/mon/50404.html>
(2005年9月19日参照)

引用文献

Schoenberg, Irene E. 『英語力診断 アメリカ横断トリビア・クイズ777』 笠井貴征編訳, ピアソン・エデュケーション, 東京, 2000.

Wilder, Laura Ingalls. *Little House in the Big Woods*. 1932, Harper Trophy, New York, 1981.

---. *Little House on the Prairie*. 1935, Harper Trophy, New York, 1981.

林道義『父性の復権』中公新書, 東京, 1997.

『ランダムハウス英和大辞典』第2版, 小学館, 東京, 1994.

Child-nurturing, Parenthood and Family in *Little House in the Big Woods* and *Little House on the Prairie* by Laura Ingalls Wilder

Kiyoshi YAMAUCHI

The Department of Liberal Arts, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585 Japan

Summary

In this essay, the author picks up and explores the descriptions on child-nurturing, parenthood and family in *Little House in the Big Woods* and *Little House on the Prairie* by an American female writer Laura Ingalls Wilder. Although these two tales are set on 19th century American frontier days, the author has found that the depictions of child-nurturing, parenthood and family are equally apply to the present days.

Key words: American Literature, Laura Ingalls Wilder, *Little House in the Big Woods*, *Little House on the Prairie*